

「瀬戸内の傾斜地域、その暮らしと景観」特集にあたって

佐竹 昭

このたび、『日本研究』誌は定期号とは別に特集号3の刊行を迎えることになった。最初の特集号は2001年3月の「厳島」特集号、次の特集号2は2003年4月の「瀬戸内の地域資源」で、いずれも具体的な地域に即した、文・理のさまざまな視角からの研究成果を取りまとめたものである。

本特集号もこれまでの共同研究を継続・発展させる立場に立ち、「瀬戸内沿岸傾斜地域の暮らしと景観、その再生に関する総合的研究」と題して広島大学研究支援金の交付を受け、その研究成果の報告を中心に構成されている。

研究への問題意識、研究目的は、以下の通りであった。

昨今の地球環境の深刻化は、これまでの成長一辺倒から持続可能性への転換を要請している。しかし地域的なアンバランスが厳存し、総論から各論への展開は困難である。日本では経済成長の停滞期を迎えてある種必然的にその転換を余儀なくされているが、よりローカルに見れば高度経済成長期の遺産が様々なひずみとなって現れており、やはり都市と農山村など地域的な差異は著しい。しかもそれは都市内部にも存在する。

本研究では、自然環境や社会環境を共有する瀬戸内海地域をとりあげ、特に傾斜地の自然と暮らしに注目する。瀬戸内海地域は、交通の大動脈に接し古くから人間活動の盛んなところであった。特に近代化以降は諸産業の高度な展開と人口集中が進み、海に向かっては干拓・埋め立てを行って臨海地域に工業地帯や商業地域が形成され、背後の傾斜地には住宅地がはいあがっていく。農漁村地域でも、海辺の小さな湾口に密集した集落が形成され、海では様々な漁法や養殖が重なり、背後の林野は段々畑に開かれていた。人為的な自然の改変が激しく行われた地域である。

しかし、現状では、都市部においても産業構造の変化を受けて空洞化が見られ、背後の住宅地では高齢化が進み、特に急傾斜地に位置するところでは交通手段がない上、防災上の問題など生活維持が困難になりつつある。一方農漁村地域ではさらに過疎化が進行し、耕地は放棄され、海も山も荒廃の姿を示している。

傾斜地の高度な利用は日本列島の随所に見られるが、瀬戸内地域のそれは典型的な事例であり、この地域の現状と問題点を把握し、自然環境との調和をはかりながら地域の再生をさぐることは早急にとりくべき課題である(プロジェクト申請書、2003.8.28付)。

具体的な研究計画では、「都市急傾斜地の生活、その現状と問題点」「農漁村急傾斜地の生活、その現状と問題点」「地域イメージの形成と新たな可能性」の3つのテーマを設定し、総合科学部・教育学研究科・工学研究科所属の14名(有志2名含む)がそれぞれ分担し、各自の研究と共に相互に情報交換を行いながら研究を進めることとした。

次に研究の経過であるが、共同研究に関わる部分だけ、以下に列記させていただく。

2003年11月、プロジェクト開始。

第1回 2003年11月5日 研究打合せ。

第2回 2004年1月7日 研究会「近世広島猪と豚」。

第3回 同年 3月13日 現地調査「呉市安浦町の近世猪鹿垣遺構」。

第4回 同年 11月21日 現地調査「呉市安浦町の近世猪鹿垣遺構」。

第5回 2005年2月2日 研究会「近世尾道の都市空間」

第6回 同年3月8日～10日 現地調査「宇和島市遊子水ヶ浦の段々畑と保存活動」。

第7回 同年6月11日 現地調査「呉市倉橋町鹿島の段々畑」。

第8回 同年6月25～26日 現地調査「宇和島市遊子水ヶ浦の段々畑と保存活動」。

第9回 同年7月27日 報告会「段々畑と地域」。研究取りまとめのための打合せ。

呉市安浦町の猪鹿垣調査では地元の方々、呉市倉橋町鹿島や宇和島市遊子水ヶ浦の段々畑の調査では総合科学部における「地域研究実習Ⅰ」の授業を兼ねて多数の学生の参加を得た。

安浦町の猪鹿垣については本号に地元の方々とともにその調査成果を掲載、段々畑の調査についても、学生の参加を得て報告書を作成掲載するこ

とができた。このような広がりを持てたことは今回の新たな成果の一つである。

右のほか、本誌にはプロジェクトのメンバーを中心に、趣旨にご賛同いただいた方々も含めて、関連の諸論考を収めている。本研究の特色は、文・理の共同研究であるとともに、具体的な地域の諸問題と結びつくかたちで研究を進めるところにある。それは本号に収められた研究成果の表題を一覧されてもご理解いただけるのではないかと思う。地域と共に歩む姿勢で研究に取り組むべく、今後とも一層のご教示、ご支援をお願い申し上げます。